

作文コンクール “Leading to the Future” 最優秀賞作品

大阪府立生野高等学校 3年 中井里佳子さん

入園式の写真に写る私は、笑顔とは言い難い表情をしていた。内気で恥ずかしがり屋の私は、幼稚園に着いても母から離れようとしなかったと聞いている。こんな私だが、卒園する頃の写真では先生の隣で笑っていた。先生が私を変えてくれたのだ。年中になった頃、先生はお遊戯会で劇の紹介文を発表するという大役を与えてくれた。そんなことできないと言う私を「絶対できるよ」と励ましてくれた。本番では堂々と発表できた。今思えば、その時から自分に自信が持てるようになったような気がする。

こんな些細な経験が後に人格形成に興味を持つようになるきっかけだったのかもしれない。日を追うごと、先生への憧れを大きくしていった。憧れが夢に変わったのは中学校で体験した幼稚園での職場体験だった。そこで私は、子どもたちが先生の行動や言葉遣いを真似するという事に気づいた。子どもたちは先生のしたことを真似たり言葉にしたりすることによって、学び、考え、成長するのだと知った。周囲の大人が子どもに与える影響は甚大だ。そして、今ではこう思うようになった。幼稚園は子どもが最初に行く学校で、幼稚園教諭は子どもたちが最初に出会う先生だ。幼稚園での経験は、その先も形成されていく人格にきっと大きな影響を与えるのだろう。

高校生になったある日、認定こども園へボランティアに行った。何をしてあげようかと綿密に計画を立てて臨んだ当日、子どもたちの元気に圧倒されながら一緒に遊んで一日が終わった。給食の時には好きなものや嫌いなものを教えてもらった。何かをしてあげたというより、私が楽しませてもらったというのが正直な感想だ。一方で、先生方は遊びながらも子どもの体調に気をつけたり、事細かに手帳に記したりと幅広い視野をもっていることがわかった。愛情だけではいけない。子どもの成長を支援するには、広い視野や行動力が必要なのだと痛感した。私が身につけなければいけない力はたくさんある。

私になりたいこの職業は、人間の基礎となる心を養う仕事だ。その確信は今もなお深まっている。私は子どもの「最初」に携わって健康な心身を形成する手伝いをしたいと願う。かつて私の先生がしてくれたように、一人一人に愛情と厳しさを持って向き合う先生になりたい。

けれども一方で、先生が完全な規範である必要はないと考える。先生もまた欠点を抱えながら正しい規範に従うべく努力している。そうした葛藤する姿をこそ、子どもは手本にするのではないか。先生の弱さや愚かさを知り、人間としての親しみを深めてゆくことも成長には大切なことだと感じる。子どもたちには身近な人を通して人間というものを学んでほしいと願う。教育とは愛情と相互信頼があってこそ成立する。先生になったらこのことを自分の根底におくつもりだ。